新年のごあいさつ

紙パルプ技術協会 理事長 池田 健郎

New Year's Speech

Kenro Ikeda

President ; JAPAN TAPPI

会員の皆様、あけましておめでとうございます。
平成3年の年頭にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

昨年は、政治的には米ソ協調、東西ドイツの統合、イラクのクウェート侵攻など激動の年でありました。社会面では、環境問題、特に地球規模での環境問題が大きくクローズアップしてまいりまして、オゾン層の破壊、酸性雨、地球の温暖化などの対策を巡る国際会議が相次いで開催され、連日のようにマスメディアを通じて報じられました。

経済面では、我が国の経済は比較的順調に推移し、'90年度は企業の売り上げ、利益とも4年連続の最高益更新となりまして、戦後最長であった「いざなぎ景気」に匹敵する好況ぶりで推移しました。しかし後半には、株安、金利高、原油高と企業収益環境にはマイナス要因が相次いで浮上してまいり、先行きの見通しに注意信号が点滅し始めました。

これらの経済動向は業種別で差がありまして、例えば、建設、重電、産業機械、造船など加工組立産業は好況に推移したのに比して、電力、鉄鋼、紙パルプなどの素材・エネルギーは低迷しておりまして、明暗がはっきりしてまいりました。

さて、本年の経済につきましては、経済の先行きに確信を持って見通すことは困難であります。経済動向を左右する因子をみてみますと、(1)中東紛争の今後、(2)アメリカ経済の動向、財政再建の進展、(3)国内の信用膨張下での土地問題の行方などがどのようになるかさらに一昨年夏頃からすでに変化が芽生え、我が国経済の体内に疲労現象が出始めておりまして、外部変化への抵抗力を失いつつある矢先であり、正に転換期を迎えていると考えております。従って、本年は景気論争が一転して、“いつまで好況が持続するか”より“今後の景気の底”をどのように読むかを考える時期では

ないかと考える次第であります。

次に紙パルプ産業の展望に触れてみたいと思います。我が国の1989年度紙の生産量は26,809千t、消費量は27,444千tとともに世界第2位であり、一人当たりの消費量はアメリカ303.9kg、スウェーデン229.1kgに次いで222.7kgと3位まで躍進してまいりました。

営業利益は'82年以降、紙パルプ産業は製造業の平均を上回り、金利低下などによる金融収支の改善も進み、'86年以降は経常利益でも製造業平均を凌駕してきましたが、昨年中頃から増益テンポは逆転して減益に転じ、本年3月期はさらに厳しさが予想されます。

紙パルプ産業の業績低迷の要因は株安、金利高、原油高などの収益環境のマイナス要因に加えて、製品価格の急速なダウン、市況の低迷、新增設ラッシュによる需給のアンバランスなどによりまして、その回復に時間がかかるものと思われます。

紙の需給動向は、一般概況としましては、'90年

度は四半期毎に見た対前年伸び率は生産・払出しとも期を追って鈍化傾向にありまして、特に非塗工印刷用紙は不調で昨年実績を下回る結果となっております。その中で塗工紙は堅調な個人消費をバックに広告・宣伝関連需要の好調に支えられ底堅い需要がありました。また大幅な伸びを示しておりました情報用紙は需要がほぼ一巡し、安定成長に入ったためか、伸びは低調に終始しました。

一方、板紙は生産・払出し共に比較的順調な伸びを示しまして紙と明暗を分ける結果となりました。板紙の需要は記録的に持続する内需を中心とした景気拡大基調の中で、旺盛な個人消費・設備投資などに支えられて増大しており、しばらくはこの傾向が持続するものと思われま

す。さて本年の需給見通しであります。経済の先行き見通し難、個人消費動向の鈍化への不安、さらに国際政治情勢から来る日本経済に対する役割分担の要請などを考えますと、経済変動から来る需給事情の変化は悪化が心配されます。新設マシンの稼働開始にともなう需給の緩和は必至であると予想されますが、生産調整の持続により、これ以上の採算悪化はなんとしても防止したいものです。

次に紙パルプ産業がかかえている課題について触れてみたいと思います。我が国の紙パルプ産業が安定的に成長を果すのに解消すべき課題としては、(1)原料問題の克服：新規ソースの開拓や海外造林、(2)古紙利用の拡大：リサイクル55計画の推進と回収システム・利用技術の確立、(3)環境問題への挑戦：地球環境への対応とダイオキシン、AOX対策、(4)製品開発と市場開発の重要性：紙需要の潜在力の発現、(5)技術開発の必要性：問題解消と競争力確保などを考えておりますが、これらは昨年度の技術協会の年次大会で述べ、本誌に記載されていますので、詳細は割愛させていただきます。

それでは技術協会の諸活動について若干触れてみたいと思います。時系列的に記しますと、昨年5月には、国際技術交流の一環として、第9回日加豪技術交流会議“1990 Pan Pacific Joint Conference”がニュージーランドで開催され、我が国から研究発表5件の発表者を含めて15名が参加しました。アメリカのTAPPIから参加の申し出

があり、次回から4カ国で順次開催することになる可能性が高まっております。次回は来年'92年に我が国で開催することになっており、その準備が開始されておりますが、皆様の積極的な参加をお願いする次第であります。

第57回紙パルプ研究発表会を6月に、第14回紙パルプ計装発表会と計装ショーを10月に、いずれも東京で開催しました。両発表会とも定員をこえる参加申し込みがありまして、参加をお断わりする程の盛況でございました。本年も両発表会はほぼ同じ時期に開催する計画でございます。今後もこのような発表会の内容を充実させ魅力あるものにしまして、会員の皆様の技術力向上に役立たせたいと考えております。

平成2年度の年次大会は、本年は会場を東京に移して、東京ならではの大会にしようとして、サブタイトルを“21世紀に向って紙パルプ技術の未来を探る”とつけ、エポックメイキングになるような大会にしようと企画しましたところ、970名を越える過去最大を記録し、極めて盛大に行うことができました。特別講演は東海大学開発技術研究所教授 唐津 一先生にお願いして、「21世紀に向かった技術の課題と展望」の題名で講演していただきました。先生は産業界で活躍された関係もあって極めて示唆に富んだお話をいただき、時間の経過するのにも忘れる位でした。さらに本大会には海外から多くの講演者がありまして海外の技術開発を直接拝聴できる幸運に恵まれました。また一般講演、製品展示会社による新製品・新技術の紹介も質的に高く、ご参加の皆様に満足していただけたものと思っております。

本年の年次大会は熊本市に移して、従来の操業経験を中心に勉強することになります。十条製紙(株)にお世話になることになっておりますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

その他にも各種の講演会・シンポジウム等の共催や協賛を予定しておりますので、積極的なご参加をお願い致します。

最後になりましたが、当紙パルプ技術協会の発展のため、皆様方の一層のご支援をお願い致しますとともに、会員の皆様方の益々のご発展をお祈りし、新年のご挨拶と致します。